

都市教養プログラムの質の向上をめざして

都市教養学部 経営学系・教授
山下 英明

以下に、FD委員会と教務委員会・基礎教育部会が実施した2008年度後期における「都市教養プログラムの授業評価」[SE = 学生による授業評価、TE = 教員による授業評価]の結果概要を紹介し、都市教養プログラムに対する今後の課題を示す。

【調査対象・質問項目・回収率】

調査対象と回収率は表1の通りである。調査を行った授業は全体の約75%で、FD活動として不十分と言わざ

表1 調査対象と回収率

調査対象	回収数	回収率	
SE 履修登録者 (名)	9817	4170	42.5%
授業 (クラス)	70	52	74.3%
TE 授業担当教員 (名)	95	46	48.4%

表2 質問項目 (SE)

問1	私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。 [態度]
問2	授業の目的を意識しながら学習することができた [意識]
問3	教員の説明はわかりやすかった [説明]
問4	教員は学生の質問・意見に対し適切に対応していた [対応]
問5	授業時間以外で一週間に平均どのくらいこの授業に関連した学習をしたか [時間]
問6	成績評価方法について十分な説明があった [成績]
問7	シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた [成果]
問8	私はこの授業を受講して満足した [満足]
問9	この授業の選択に当たりシラバスは役立った [シラバス]
問10	この授業の難易度はあなたにとってどうか [難易度]
問11	この授業を受講して、自分の視野が広がった [視野拡大]

るを得ない。また、履修登録者の回収率は授業の回収率の6割以下であり、学生の授業の出席率の低さがわかる。

SE [学生による評価]の質問は表2の通りである。問9以降は都市教養プログラム独自の質問項目である。本レポートで使用する略称も併せて掲げる。TEの質問項目は、SEと同一の焦点について、教員側の自己評価や、学生の態度を観察した評価を尋ねているが、ここでは主にSEの結果について報告する。回答は「強く思う・そう思う・どちらとも言えない・そう思わない・全くそう思わない」から選択し、順に5・4・3・2・1の点を与えた。ただし、問5は「2時間以上・90分程度・1時間程度・30分程度・ほぼ0時間」から、問10は「易しかった・やや易しかった・どちらとも言えない・やや難しかった・難しかった」からそれぞれ選択し、同様に5から1の点を与えた。

【学生一人一人をサンプルとした平均値】

回答内容が異なる問5 [時間] と問10 [難易度] を除き、SE [学生による評価] の回答平均を高い順から並べると、[視野拡大] 3.72、[説明] 3.63、[満足] 3.58、[対応] 3.50、[成績] 3.37、[意識] 3.36、[態度] 3.35、[シラバス] 3.27、[成果] 3.26であった。この順序は前回の2008年前期の調査結果とほとんど変わらない。各項目の平均も、最も変化が大きい [シラバス] でさえ+0.04の違いであり、前回とほとんど変化していない。視野拡大と成果の差が0.46と大きく、学生は「視野は広がったが、それが必ずしもシラバスに目標とされている知識や能力の獲得と一致していない。」と感じていると見られる。この点に、教員が講義内容、講義方法を再考する余地があるかもしれない。

また、問5 [時間] には、68.7%がほぼ0時間、17.7%が30分程度と回答し、授業に出席している学生でさえ授業時間以外ではほとんど学習していない実態がわかる。これに対し、問10 [難易度] に、難しい、またはやや難しいと回答したのは23.4%に過ぎない。これも前回の調査と同じ傾向であるが、都市教養プログラムの大半は、予習や復習をしなくてもそれほど難しくない授業になっていると推察する。これは単位の実質化とはかけ離れた実態であり、学生が授業以外でももっと学習し、授業内容の理解を深めるように動機づけする努力と工夫が

教員に求められる。

【満足度別の平均値】

次にSE [学生による評価] について、問8 [満足] の5段階評価で1・2・3と回答した者を「満足群」、4・5と回答した者を「非満足群」とし、各々について問8以外への質問への回答平均値を比べた。

満足群は全質問に肯定的回答を、非満足群は否定的回答を寄せる傾向がある。問5 [時間] と問10 [難易度] を除き、満足群と非満足群の差が少ないのが [成績] 0.69、[対応] 0.78で、[シラバス] 0.81、差が大きいのが [説明] 1.11、[視野拡大] [態度] [意識] [成果] の1.01であった。この結果も前回の調査とまったく同じ傾向を示し、学生は説明がわかりやすく、聞いているだけで知識や能力が獲得でき、自分の視野が広がる授業に満足することがわかる。

一方、問10 [難易度] については満足群と非満足群の間の差は0.28で、ほとんど差がない。これも毎回指摘されていることであるが、授業が難解だったから不満足になるという傾向はほとんどない。つまり、学生は必ずしも安易な授業を望んでいるわけではない。むしろ、授業が安易過ぎても満足しないのかもしれない。ある程度難しいこと、自分が今まで知らなかったことを、授業中にわかりやすく説明してくれることに満足すると考えられる。

教員は学生がわかりやすい説明を心がけることはもちろん重要である。そうでないと、学生は授業に見向きもしなくなる。しかし、授業の役割は新しい知識を学生に伝えることだけではない。異論もあるかもしれないが、教員は学生の興味を引き付けつつ、学生に自分で考える訓練をさせるべきである。論理的思考能力を養うことこそが、教養教育に求められている最大の目的であると考ええる。

【SEデータとTEデータの比較】

ついで、各質問項目の平均値を、SE [学生による評価] とTEデータ [教員による評価] において比較した。

学生評価と教員評価の差が大きい項目は、[意識] [視野拡大] [説明] [成績] [シラバス] であり、逆に、学生評価と教員評価の差が大きい項目は、[満足] [難易度] であった。ちなみに、全項目において学生評価よりも教員評価の方が高い平均値を示した。教員が考えているほど、教員の説明はわかりやすくなく、学生は目的意識を持って学習しているわけでもない。その結果、教員が考えているほど視野拡大に結び付いていない。また、シラバスや成績評価の説明には、学生は教員が考えているほ

ど納得していない。それでもなお学生は教員が考えている程度に授業に満足しているという、不可解な結果となった。

ひとつの解釈として、学生と教員の要求水準が乖離していると考えることができよう。教員は自分の理想の授業に近づくよう、シラバスの作成、授業の構成や説明に努力し、ある程度達成感があるが、実は教員が考えているほど理想の授業にはなっていない。しかし、学生の授業に対する要求がそれほど高くないので、学生の満足度はそれほど低くはならない。このように考えると、教員は自己満足することなく、よりの確に実態を把握し、授業の質を向上することが必要である。と同時に、学生が授業から知識や考え方をより貪欲に吸収する姿勢を持つことも、教養教育の質の向上に必要な不可欠であると考ええる。

【まとめ】

都市教養プログラムには、多くの課題があり、授業評価によってこれらの課題が顕著になるだけでなく、その解決策も窺い知ることができる。その意味で、FD活動としての授業評価を否定するものではない。しかし、このまま毎年同じような調査を行って、同じような結果を得ることにはあまり意義を感じない。

SE [学生による評価] の自由記述にも、このような調査の意義を疑問視する意見や、授業の改善点を明らかにするよう求める声も少なくない。教員は、授業評価を通して常に授業の内容改善に努めることはもちろんであるが、授業評価の内容と授業の改善点を学生に説明し、学生の理解を得ることが、学生の授業評価に迎合することなく、授業の質を向上するために重要であると考ええる。

ここで挙げた課題の多くは、教員と学生の両方の意識改革がないと解決できないことは言うまでもない。FD活動は、単に授業評価を行うだけではなく、教員と学生が教育の質の向上に取り組む新たな時期に来ているのではないだろうか。